

宮崎県文化財調査報告書 第42集

おさほづかめさほづか

男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量報告書

平成11年3月

宮崎県教育委員会

序

西都原古墳群は、全国有数の規模を誇る巨大古墳群として昭和27年に国の特別史跡に指定されました。さらに、昭和40年代には「風土記の丘」整備事業として史跡整備の先鞭をつけ、以来自然景観と田園風景に調和した秀麗な古墳群として高い評価を受けてきました。

さて、県教育委員会では平成7年度から文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」の補助を受け、新たな整備事業に着手しています。「風土記の丘」整備事業から四半世紀余りの時期を経て、再び全国に先駆けて整備事業に着手できましたことは、地元の皆様をはじめ関係者の熱意の賜であるとともに、古代史の謎を秘める西都原古墳群の存在が全国的にも注目を集めている証拠といえます。

特に明治28年に陵墓参考地に治定された男狭穂塚・女狭穂塚は当古墳群の5世紀前半の盟主墳として他の古墳を圧する規模を誇ると共に、ヤマト王権との密接なつながりがうかがえます。しかし、両古墳は宮内庁が管理する陵墓参考地であるために原則として立ち入ることができません。今回、宮内庁の特段の配慮により立ち入り測量の許可をいただきましたので、西都原古墳群保存整備事業の一環として実施することになりました。

今回作成した測量図を詳細に検討することによって男狭穂塚・女狭穂塚の墳形と規模、他の古墳との比較などの研究に大いに寄与すると考えられます。

平成11年3月

宮崎県教育委員会
教育長 笹山 竹義

例　　言

- 1 本書は宮崎県教育委員会が平成9年度に実施した男狹穂塚女狹穂塚陵墓参考地立ち入り測量の報告書である。
- 2 立ち入り測量にあたっては、宮内庁書陵部陵墓課、桃山陵墓監区事務所の立ち会い、指導をいただいた。
- 3 本書の執筆及び編集は宮崎県文化課埋蔵文化財係主査、長津宗重が担当した。
- 4 測量については株式会社 村上測量設計事務所に委託した。

本 文 目 次

第1章 はじめに

第1節 男狹穂塚女狹穂塚陵墓参考地立ち入り測量の理由

第2節 立ち入り測量に至る経緯

第2章 測量の結果

第1節 男狹穂塚

第2節 女狹穂塚

挿 図 目 次

第1図 西都原古墳群分布図

付 図 目 次

付図1 男狹穂塚女狹穂塚墳丘測量図

第1章 はじめに

第1節 男狹穂塚女狹穂塚陵墓参考地立ち入り測量の理由

宮崎県は、全国有数の古墳分布地帯で、なかでも西都原古墳群（西都市大字三宅）は古墳の密度・巨大古墳の存在・墳形の多彩さ・長期間の造営で著名である。当古墳群は、一つ瀬川右岸の標高60m（比高50m）の洪積台地（東西2.6km、南北4.2km）に位置し、前方後円墳32基、円墳279基、方墳1基、地下式横穴墓10基・横穴墓12基で構成された4世紀～7世紀前半の大古墳群である⁽¹⁾。この地を拠点にして古墳時代を通じて一大勢力があったことが知られる。明治28年12月4日に陵墓参考地に治定された男狹穂塚・女狹穂塚は、この古墳群の高位の標高69m（比高59m）にあって、他の古墳を圧する規模を誇り、その中核となる5世紀前半の盟主墳である。

男狹穂塚は、主円丘部径が130mを越す巨大古墳であるが、前方部をどこから認識するかで墳形が前方後円墳・柄鏡式古墳・帆立貝式古墳・造り出し付き円墳などの諸説、全長が211m、167m、148mなどの諸説があり、墳丘規格は古市古墳群の応神天皇陵古墳（大阪府羽曳野市、墳長415m）の二分の一との指摘されている⁽²⁾。宮内庁書陵部の調査によれば当古墳の壇状部にある参拝所から円筒埴輪が出土している⁽³⁾。

女狹穂塚は、全長175mの九州最大（全国48番目）の前方後円墳で、墳丘規格は百舌鳥古墳群の履中天皇陵古墳（大阪府堺市、墳長360m）の二分の一、古市古墳群の仲姫陵古墳（）の五分の三⁽⁵⁾との指摘されている。宮内庁書陵部の調査によれば当古墳の後円部の西側斜面とくびれ部付近で形象埴輪（家・盾・甲冑）と円筒埴輪⁽⁶⁾が、外堤上で円筒埴輪が出土している⁽⁷⁾。出土した埴輪は川西編年⁽⁸⁾のⅢ期に相当し、5世紀前半に位置づけられている⁽⁹⁾。

以上のように、男狹穂塚・女狹穂塚の墳形の比較から5世紀前半に西都原古墳群の政治勢力がヤマト王権と緊密に結びついて強大であったことをうかがわせ、この古墳群の消長や特質を考える上でかかせない重要な古墳である。また墳形などなお考究すべき問題点があり、その解明には両古墳の詳細な情報が是非とも必要で、精細な測量図作成とこれによる外形の比較研究は有効な手段と考えられる。本県では西都原古墳群の前方後円墳の精細な墳丘測量図（縮尺1/250・20cmコンタ）を7年度までに作成したが、男狹穂塚・女狹穂塚については、陵墓参考地であるために作成していない。なお唯一の測量図である宮内庁作成の墳丘測量図（大正15年測量、昭和4年製図）は、縮尺1/1,000、1mコンタで、両古墳の墳形の精確な理解には、十分とはいがたい。

当古墳群は、大正元～6年に30基が発掘調査され⁽¹⁰⁾、その結果を受けて昭和9年に国の史跡に、同27年に国の特別史跡に指定され、同43年度に「風土記の丘」第1号として「森の中の古墳群」・「草原の古墳群」・「古墳間での散策」というイメージで古墳と自然が調和した歴史的景観を維持・保存するための整備が行われた。以来、県内外の人々に親しまれてきたところであるが、整備後30年がたち、時代は遺跡の保護から活用へと変化し、文化財に対する国民の関心も一段と高まっている。本県では、これに対応すべく、特別史跡を核として周辺地域をも含めた総合的な整備計画を文化庁・西都市とともに検討

している。平成7年度からは、「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」に着手し、鬼の窟古墳・1・3号墳など古墳の復元整備や西都原古代生活体験館オープンなどの新しい体感できる古墳群の整備の結果、見学者が増加傾向にある。この流れの中で男狹穂塚・女狹穂塚陵墓参考地は、この事業の直接的な対象とはしていないが、当古墳群の整備が進むに従って見学者の陵墓参考地に対する関心は一層高まっている。

そこで男狹穂塚・女狹穂塚は、陵墓参考地であるために特別史跡の指定地から除外され、原則として立ち入ることができない現状にあるが、参考地に立ち入って男狹穂塚・女狹穂塚の精細な測量（縮尺1/250、20cmコンタ）を行い、将来これをもとに大縮尺（縮尺1/50）のレプリカを製作し、西都原資料館等に展示する予定である。これによって見学者は陵墓参考地に立ち入ることなく男狹穂塚・女狹穂塚の形や大きさを体感することができるものと期待される。またこの測量データーを詳細に検討することによって男狹穂塚の墳形と規模、他の古墳との比較などの研究に大いに寄与すると考えられる。

（注）

- 1 西都原古墳群の首長墓の変遷については下記の文献がある。
 - 日高正晴「日向の古墳と西都原古代文化圏」『西都原古墳研究所年報』創刊号 昭和59年（1984）
 - 北郷泰道「地域の古墳－九州南部（宮崎・鹿児島県）」『古墳時代の研究』10 平成2年（1990）
 - 長津宗重「日向」『前方後円墳集成 九州編』平成4年（1992）
 - 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号 平成7年（1995）
- 2 綱千善教「古墳築造よりみた幾内と日向」『関西大学考古学等資料室紀要』第2号 昭和60年（1985）
- 3 福尾正彦「男狹穂塚陵墓参考地参拝所美化作業に伴う出土品」『書陵部紀要』第44号 平成5年（1993）
 - 福尾正彦「男狹穂塚女狹穂塚陵墓参考地外周 垣改修その他工事に伴う調査」『書陵部紀要』第47号 昭和8年（1996）
- 4 註1文献と同じ
- 5 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号 平成7年（1995）
- 6 福尾正彦「女狹穂塚陵墓参考地出土の埴輪」『書陵部紀要』第36号 昭和60年（1985）
- 7 福尾正彦「男狹穂塚女狹穂塚陵墓参考地外周 垣改修その他工事に伴う調査」『書陵部紀要』第47号 昭和8年（1996）
 - 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号 昭和54年（1978）
- 9 福尾正彦「男狹穂塚・女狹穂塚」『宮崎県史 資料編 考古2』 平成5年（1993）
- 10 宮崎県『宮崎県県民文化部西都原古墳調査報告』大正4年（1915）
 - 宮崎県『宮崎縣西都原古墳調査報告書』大正6年（1917）
 - 宮崎県『宮崎縣史蹟調査報告』第3冊 大正7年（1918）
- 11 宮崎県教育委員会『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書(1)』平成8年（1996）
 - 宮崎県教育委員会『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書(2)』平成9年（1997）
 - 宮崎県教育委員会『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書(3)』平成10年（1998）



第1図 西都原古墳群周辺地形

第2節 立入測量に至る経緯

第1節に述べた理由によって平成8年度に11月18日付け108-429号で県教育長から宮内庁書陵部長あてに立ち入り測量の許可を申請し、12月27日付け宮内書発第1022号で書陵部長から許可された。9年3月10日～14日に、宮内庁書陵部桃山監区事務所横山忠雄陵墓守部の立ち会い、宮内庁書陵部陵墓課笠野 毅陵墓調査官の指導で参考地内の木や下草等の状況調査などの事前調査を行った。

9年度には7月7日付け108-230号で立ち入り測量及び伐開の許可を申請し、7月14日付け宮内陵桃発第194号で宮内庁書陵墓桃山陵墓監区事務所長から許可された。立ち会い測量及び伐開は横山忠雄陵墓守部の立ち会いで7月14日～11月21日に行い、8月4～6日に宮内庁陵墓課福尾正彦主任研究官、9月3～5日に同徳田誠志主任研究官、10年1月12～14日に同清喜裕二事務官、3月4～6日に同笠野 毅陵墓調査官に測量指導及び測量図校正を受けた。3月25日に測量図が納品された。

第2章 測量の結果

第1節 男狭穗塚

1 墳丘の概要

主円丘部が3段築成の造り出し付き円墳である。墳丘周囲には壇状部東南側が堀がとぎれる耳環状の堀を二重巡らし、その間に中堤がある。主円丘部の北西方向に重要文化財の子持家形埴輪・舟形埴輪を出土した169号墳（直径4.4m、高さ7mの円墳）・170号墳（直径4.5m、高さ1.8mの円墳）があり、両古墳は陪塚と考えられている。古墳の現況は杉などの木に覆われているが、保存状態は良い。

墳丘はほぼ水平な地形上に造営されており、見かけの墳端は主丘部北西側が6.7.2m、壇状部南東側が6.9.6mである。現状で計測される墳丘規模は全長（外堀外径）249.1m、墳長154.6m、主円丘部径132.0m、同高さ19.1m、同標高85.6m、くびれ部幅45.5m、造り出し幅40.7m、同高さ4.5m、標高71.4m、内堀幅1.5～1.8m、中堤幅1.7～2.3m、外堀幅2.0～2.5mである。主円丘部の直径は女狭穗塚後円部の直径より大きい。

2 周堀・中堤

墳丘周囲には壇状部東南側が堀がとぎれる耳環状の堀を二重巡らし、その間に中堤がある。内堀幅1.5～1.8m、中堤幅1.7～2.3m、外堀幅2.0～2.5mである。

耳環状の内堀は東側がくびれ部から壇上部に沿って南に直線的に伸びるのに対して、西側は環状のままである。内堀の現状底面は、主円丘部の北西部が標高65.8mが最も深く、最も浅い主円丘部の東部の標高67.0mとは1.2mの比高差があるが、全体的にはほぼ水平である。

外堀の北部から西部に幅約13.0mの渡り土堤がある。渡り土堤の中央部が標高69.4mと最も高く、渡り土堤下は標高68.2mで比高差は1.2mである。外堀の現状底面は、主円丘部の北西部が標高67.2mが最も深く、最も浅い主円丘部の東部の標高68.2mとは1.0mの比高差がある。

中堤は壇状部の手前で切れており、北西部が標高69.8mと最も高く、最も低い標高68.4mとは比高差は1.4mである。内堀底面から中堤上面までの比高差は、最大2.8mである。外堀底面から中堤上面までの比高差は、最大1.2mである。中堤の両端は緩やかに傾斜し、東端は外堀の底面で消え、西端は平坦面で消える。

3 主円丘部

主円丘部は直径130.0～132.0mとほぼ正円である。墳頂はほぼ水平で、直径31.0～33.0mの平坦面である。頂高は標高85.6mで墳端標高66.5mからの比高差は19.1mである。墳頂から主円丘部に至るスロープはない。

墳丘の2段のテラス面は明瞭である。1段は標高69.8mを前後してほぼ水平に主円丘部を全周する。

テラス幅は6~10mである。2段は標高73.8mを前後してほぼ水平に全周し、壇状部側への張り出しが認められる。テラス幅は7~10mで、1段と同規模である。1段目テラス面と中堤の高さは同じである。各段の傾斜角度は、1段が18~30度、2段が25度、3段30度、段斜面の長さは、1段が26m、2段が8m、3段が15mである。

段差の見かけの比高差は、7m、4.5m、6.5mとなり、2段を1とした場合の比は、1段が1.6、3段は1.4となる。斜面長の比は、2段を1とした場合、1段が3.1、3段が1.8である。

4 壇 状 部

現況の壇状部の前面の墳端の標高は69.4mで、主円丘部の2段墳端の標高70.2mから徐々に低くなる。前面の墳端は1段目テラスのくびれ部付近とほぼ同じ高さである。側面の墳端線は東側はほぼ直線に伸びているのに対して、西側は1段目テラスのくびれ部付近から大きくなっている。現況の前面墳端は主円丘部の中軸線に直交している。現況の前面の幅は40.7mであるが、50mに復元される。

墳丘斜面は東側側面の1段テラスは主円丘部から前面まで連続しているが、西側斜面は大きくなっている。1段テラスの幅は6m前後と主円丘部の最小値である。1段斜面角度は25度、斜面長7m、1段テラスよりも上位斜面は10度である。主円丘部の2段テラス面から同レベルで壇状部へくびれ部幅35m、長さ15mの造り出しがある。

墳頂の平坦面は標高71.4mで造り出しの標高73.0mより比高差1.6mである。内堀の現状底面より比高差4.0mである。

5 土 塚 状 の 高 ま り

壇状部の南東方向に幅20m、長さ65m伸びる土塚状の高まりは、端の標高68.0mに対して、頂部は標高71.2mで比高差2.6mである。

6 ま と め

測量の結果、墳丘規模は全長（外堀外径）249.1m、墳長154.6m、主円丘部径132.0m、同長さ19.1m、同標高85.6m、くびれ部幅45.5m、造り出し幅40.7m、同高さ4.5m、標高71.4m、内堀幅15~18m、中堤幅17~23m、外堀幅20~25mである。

従来の測量図では主円丘部と壇状部とのつながりが、東側では明瞭であるのに対して、西側の形状が明瞭でなかった。今回の測量で2段テラス面の西側にも明確に屈折したくびれ部が確認され、東側の壇状部の屈折部と対応すると考えられる。内堀・外堀とも壇状部で切れており対応する。土塚状の高まりの土量は壇状部の西側部分の削られ土量とほぼ対応する。このことから、主円丘部に短い壇状部を造った古墳であり、造り出し付きの円墳とすれば、馬見古墳群の乙女山古墳（奈良県河合町、墳長130m）を抜いて日本最大の円墳である。

第2節 女狭穂塚

1 墳丘の概要

後円部・前方部とも3段築成の前方後円墳である。北東側と南西側のくびれ部から前方部側面にかけて造り出しがある。墳丘周囲に盾形周堀を巡らし、その外に外堤がある。後円部の南北方向に陪塚である170・171号墳がある。古墳の現況は杉などの木に覆われているが、保存状態は良い。

墳丘はほぼ水平な地形上に造営されており、見かけの墳端は後円部北西側が66.0m、前方部南東側が65.0mである。現状で計測される墳丘規模は全長221.8m、墳長176.3m、後円部径96.1m、同高さ14.6m、同標高80.2m、くびれ部幅71.1m、前方部幅109.5m、同高さ12.8m、標高78.2mである。

2 周堀・外堤

墳丘周囲には幅1.4～1.8mの掘が側縁が直線となった広い盾形に巡り、その外に高さ2.2m、幅1.5～1.8mの外堤がある。

内堀の現状底面は、前方部の南西部が標高64.0mが最も深く、最も高い後円部の北西部の標高65.8mとは1.4mの比高差があるが、全体的にはほぼ水平である。

外堤は、北西部が標高68.2mと最も高く、最も低い北東部の標高68.0mとは比高差は0.2mである。内堀底面から外堤上面までの比高差は、最大2.2mで、堤幅は1.5～1.8mである。外堤は南西部・南東部は高まりとして明確であるのに対して、北東部は堤状の高まりではなく平坦である。

3 後円部

後円部は直径94.0～97.0mとほぼ正円であるが、男狭穂塚より一回り小さい。墳頂はほぼ水平で、直径28.0～32.0mの平坦面で、男狭穂塚と同規模である。頂高は標高80.2mで墳端標高65.8mからの比高差は14.4mである。頂高は男狭穂塚より5m低い。墳頂から前方部に至る明確なスロープが認められる。

墳丘の2段のテラス面は東側は明瞭であるのに対して、西側は不明瞭である。1段は標高68.0mを前後してほぼ水平に後円部を全周する。テラス幅は5～7mである。2段は標高71.0mを前後してほぼ水平に全周する。テラス幅は4～5mで、1段より一回り小さい。1段目テラス面と北東部の外堤の高さはほぼ同じであるが、南西部の外堤はやや低い。各段の傾斜角度は、1段が25度、2段が20度、3段が30度、段斜面の長さは、1段が6m、2段が6m、3段が19mである。

段間の見かけの比高差は、2.5m、3m、8mとなり、2段を1とした場合の比は、1段が1.2、3段が2.7となる。斜面長の比は、2段を1とした場合、1段が1、3段が3.2である。

4 くびれ部と造り出し

くびれ部の標高は両側とも 6.5.6 m である。くびれ部から前方部両側に造り出しがあり、造り出し上面の標高は東側が 6.7.0 m、西側が 6.8.0 m である。造り出しは 1 段目斜面の中位から造営している。造り出しあくずれているが、平面形は台形である。東側造り出しが下端の長さは約 1.5 m、外方への突出が 7 m、高さ 2.4 m であるのに対して、西側造り出しが下端の長さは約 1.8 m、突出が 1.2 m、高さは 2 m である。

5 前方部

標高 8.0.2 m の後円部からスロープ状に幅 1.0 m、長さ 2.0 m に下降して、標高 7.5.2 m の前方部平坦面に至る。その平坦面は前端に向かって次第に広くなり、途中で台形状に高くなる。前面頂が最も高く 7.8.2 m で、後円部頂との比高差は 2.0 m である。くびれ部を基準した場合の前方部高は 1.2.6 m、前方部前面墳端を基準した場合の前方部高は 1.3.2 m である。

側面の墳端は後円部より 1 m、前面に向かって徐々に低くなり、前面の墳端はくびれ部付近よりも 0.6 m 低い。側面墳端線は両側ともほぼ直線的に伸び、前面墳端は中軸線に直交している。前方部はくびれ部幅は 6.7 m であるのに対して前方部端幅は 1.0.9.5 m と台形状に広がる。

墳丘斜面は東側と前面が 1・2 段テラスが明瞭であるのに対して、西側は不明瞭である。1 段は東側が標高 6.7.0 m、前面と西側が標高 6.8.0 m を前後してほぼ水平に前方部を全周する。テラスの幅は 5 m 前後と後円部に比較するとやや狭い。2 段は東側が標高 7.1.0 m、前面と西側が標高 7.2.0 m を前後してほぼ水平に前方部を全周する。テラス幅は 5 m 前後で後円部とほぼ同規模である。各段の傾斜角度は、1 段が 30 度、2 段が 25 度、3 段が 30 度、傾斜面の長さは、1 段が 6 m、2 段が 7 m、3 段が 1.2 m である。

段間の見かけの比高差は、2.5 m、3 m、5.5 m となり、2 段を 1 とした場合の比は、1 段が 0.8、3 段は 1.8 となる。斜面長の比は、2 段を 1 とした場合、1 段が 0.9、3 段が 1.7 である。

6 まとめ

測量の結果、女狹穂塚は全長 2.2.1.8 m、墳長 1.7.6.3 m、後円部径 9.6.1 m、同高さ 1.4.6 m、同標高 8.0.2 m、くびれ部幅 7.1.1 m、前方部幅 1.0.9.5 m、同高さ 1.2.8 m、標高 7.8.2 m である。従来の測量図では後円部・前方部の 3 段築成は不明確であり、一重周堀と両側のくびれ部より前方部側に造り出しを有している。今回の測量の結果、前方部の西側部分以外は墳丘部分の 3 段築成が図上で表現されたが、前方部の西側部分は古墳丘自体がくずれており、本来の 3 段築成が不明瞭である。

男狹穂塚・女狹穂塚の関係について男狹穂塚の周堀が女狹穂塚の周堀に切られているという指摘があるが、今回の測量結果では、両古墳の周堀は接している。

計測一覧表

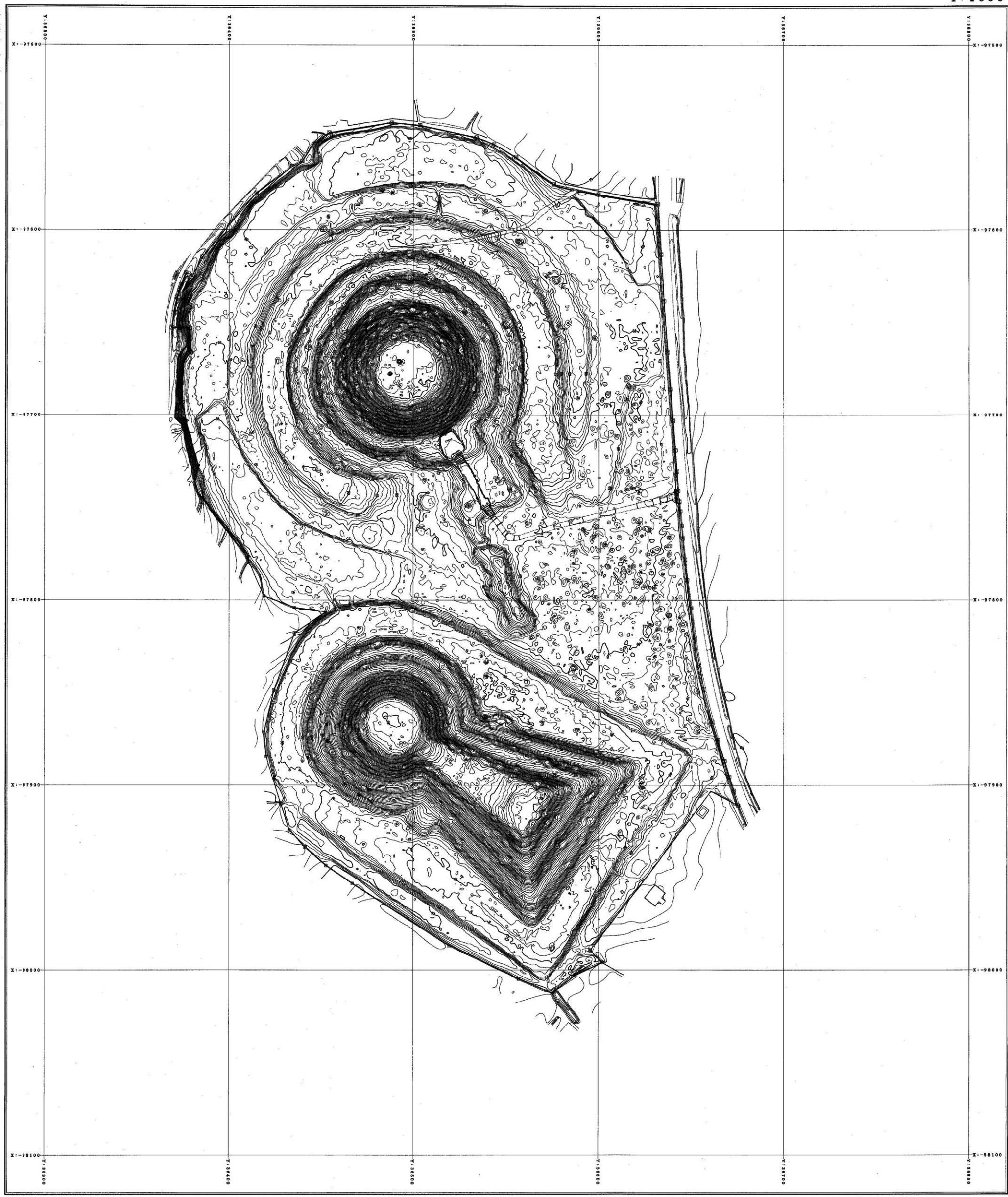
単位:m

男 狹 穗 塚		女 狹 穗 塚	
全長	(外堀外径) 249.1	全長	(主軸長) 221.8
墳長	(二段目) 154.6	墳長	176.3
主円丘部径	132.0	後円部径	96.1
高さ	19.1	高さ	14.6
標高	85.6	標高	80.2
くびれ部幅	(二段目) 45.5	くびれ部幅	71.1
造出幅	(40.7)	前方部幅	109.5
高さ	4.5	高さ	12.8
標高	71.4	標高	78.2

西都原古墳群 男狭穂塚・女狭穂塚地形測量図

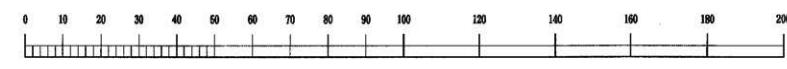
1:1000

平成十年三月 調製



宮崎県教育委員会

1:1000



平成十一年三月

1999年3月

宮崎県文化財調査報告書 第42集

男狹穂塚女狹穂塚陵墓参考地測量報告書

発 行 宮崎県教育委員会

編 集 宮崎県教育庁文化課